

# Arthur Rimbaud の *Promontoire* について

— 後置修飾と詩的空間の拡大を中心に —

藤 井 仁 奈

## Sur *Promontoire* d'Arthur Rimbaud

— l'expansion de l'espace poétique par l'usage des adjectifs postposés —

Nina Fujii

This work, *Promontoire*, which was written by Arthur Rimbaud, contains a lot of description on outer scenery. However, in such cases as the imaginary cities are described, the viewpoint of the narrator is important. This imaginary city in this work expands from one part to the whole, by skilful technique of narration; to the expansion of the poetic space, arrangement of nouns chosen deliberately, postpositive phrases and clauses of qualifier operate effectively. At last, a lot of constructions are united by a noun, Palais-promintoire. In this thesis, I'd like to analyse the grammar framework, noun arrangements and postpositions of qualifier, and to consider the movement of viewpoint of the narrator and the expansion of poetic space in this work.

### 【はじめに】

アルチュール・ランボオによって書かれた詩は、どれも視覚的に工夫され、その技巧には目を眩るものがある。詩篇『イリュミナシオン』に収められた作品には、この特徴が顕著である。とりわけ、都市詩篇と呼ばれる作品群<sup>(1)</sup>には、映像的な視点の移動が見られる。この論文では、

その中でも、*Promontoire* (以下「岬」と表す) を取り上げ<sup>(2)</sup>、文法構造と名詞及び後置修飾について分析し、作品内における視点の移動と詩的空間の拡大について、考察したいと思う。

### 【形式的側面について】

早速、「岬」のテキストを見てみたい。ただし、日本語について言えば、日本語は修飾と被修飾の語順がフランス語（原典）とは逆になるため、視点の移動も逆方向へと向かってしまう。原文における視点に着目して頂きたい。

#### PROMONTOIRE

L'aube d'or et la soirée frissonnante trouvent notre brick en large en face de cette Villa et de ses dépendances, qui forment un promontoire aussi étendu que l'Épire et le Péloponnèse, ou que la grande île du Japon, ou que l'Arabie! Des fanums qu'éclaire la rentrée des théories, d'immenses vues de la défense des côtes modernes; des dunes illustrées de chaudes fleurs et de bacchanales; de grands canaux de Carthage et des Embankments d'une Venise louche; de molles éruptions d'Etnas et des crevasses de fleurs et d'eaux des glaciers; des lavoirs entourés de peupliers d'Allemagne; des talus de parcs singuliers penchant des tête d'Arbre du Japon; les façades circulaires des «Royal» ou des «Grand» de Scarbro' ou de Brooklyn; et leurs railways flanquent, creusent, surplombent les dispositions de cet Hôtel, choisies dans l'histoire des plus élégantes et des plus colossales constructions de l'Italie, de l'Amérique et de l'Asie, dont les fenêtres et les terrasses à présent pleines

d'éclairages, de boissons et de brises riches, sont ouvertes à l'esprit des voyageurs et des nobles—qui permettent aux heures du jour à toutes les tarentelles illustres de l'art, de décorer merveilleusement les façades du Palais—Promontoire. <sup>(3)</sup>

## 岬

エイペロスやペロポネソスの半島か、或いは日本の巨島かアラビア半島ほどに広がっているのは、一つの岬、その岬を形作っているこの別荘と対屋に面した沖合いに漂っている僕たちの舟を、金色の暁とそよぎ渡る夕暮が見出している！寺院、それが照らし出すのは使節団の帰還、現代的な海岸線の防壁という、果てしない景観との再会。熱い花々と酒宴によって描き出された砂丘。カルタゴの大運河や怪しげなヴェニスの築堤、力のないエトナ山の噴火や、花々と凍てついた水の罅、ドイツのポプラに囲まれた洗濯場。「日本の樹」の梢へと傾いている風変わりな庭園の傾斜、それからスカボローとかブルックリンにありそうな「ロワイヤル」とか「グランド」とかいうホテルの、円形をした正面の構え。そうして、歴史の中から、イタリア、アメリカ、アジアの、最も優美で巨大な建造物の中から選ばれたこのホテルでは、その鉄道が、これらの配置物を並べ、掘り下げ、突き出させているが、今となっては、炬火と酒とたゆたに吹く爽風に溢れる窓とテラスが、旅人と貴人の精神に開かれている — 昼には海岸のすべてのタランテラ舞曲に、 — そして巧みさで有名な谷合のリトルネロ旋律にさえ、彼らは「岬御殿」の正面の構えを素晴らしく飾り立てることを認めているのだ。

まず第一に、この作品は、語り手の視点が、一点 (notre brick) から、岬を取り巻く空間全体へと拡大していることが判る。また、第二に、この作品は、全部で2文から成っている<sup>(4)</sup>が、第1文では、主部と述部を提示してから、それに連なる修飾句や修飾節を置いている。そしてこの修飾句や修飾節の中心は被修飾語である名詞 (cette Villa et de ses dependences) であり、語り手の視点がこの名詞から拡大していくように、修飾節内の主語 (un promontoire) と述語動詞 (forment) が倒置されている。第2文では、名詞と修飾句や修飾節から成るパターンが繰り返し提示された後、そこまでに提示された名詞を包括するように、railwayを主語とする、述部を有した文が一文、展開される。しかし、述部に含まれる目的語 (les dispositions) には修飾句や修飾節が連ねられ、作品は、主題を再提示する名詞 (Palais-Promontoire) によって締め括られている。

ところで、長大な第2文は、大きく二つに分けることができる。即ち、名詞と修飾句や修飾節から成るパターンを反復している前半部分と、railwayを主語として用い、主部と述部を有している後半部分である。

第2文前半部分については、被修飾語である名詞を強調する形で、名詞と修飾句や修飾節のパターンが反復されている。この反復によって、視点の移動がなされていると同時に、特徴的な名詞の配備によって、詩的空間を拡大させる。また、名詞と修飾句や修飾節の構造が、被修飾語である名詞を中心に据えることで、同心円的な視点の拡大をも担っている。

第2文後半部分については、railway以降が主部と述部から成っている。前半部分で提示された、同心円的な視点を別々に提示する名詞を、railwayが統合している。そして、最後に名詞Palais-Promontoireがしめくくっているのは、前述した通りだ。

### 【名詞の種類について】

では、詩的空間の拡大を担っている名詞とは、いったいどのようなものだろうか。「岬」を読み進めていると、地理的な固有名詞が多いことに気付く。国名、都市名、地名といった具体的な土地を表す名詞は、詩的空間の拡大のためのキーワードになっている。中地義和氏は、「地理上歴史上のさまざまな地点から切り取られた要素は、読み手をそれらが属していた現実へと送り返すのではなしに、新たな現実を創出するための素材となる」<sup>(5)</sup> とした上で、ガルタゴとヴェニスについては、「現実世界の地名が名指しされてはいるが、カルタゴには実は「運河」は存在せず、ヴェニスは不定冠詞付きの「怪しげなヴェニス風の街」のモデルにすぎない。」と述べているし、ドイツのポプラについても、「ポプラの種類としては現実に存在しない」と指摘している<sup>(6)</sup>。しかしながら、これらの固有名詞が、それぞれの土地の含有する具象的要素を、想起させるために用いられていることも否めない。つまり、ヨーロッパでこの作品が書かれたことを考えるならば、ヨーロッパからは遠隔地であると言える、空間的な広がりや連想させるような土地を表す名詞が、詩行の中に織り込まれているのである。

こういった固有名詞の利用の仕方とは対照的に、この「岬」という架空の都市の創造に、普通名詞が巧みに利用されていることにも注目したい。具体的に言うと、*cette Villa*、*Embankments*、*Arbre du Japon*、*Royal*、*Grand*、*cet Hôtel*、*Palais-Promontoire* である。これら固有名詞化された普通名詞は、「岬」という作品内の詩的空間が、個別限定的な場所として認識される効果を与えている。とりわけ、*cette Villa* と *cet Hôtel* と *Palais-Promontoire* は同一の包括的空間の名称として用いられており<sup>(7)</sup>、「岬」という空間に対する限定的名称として用いられているとも解釈できる。

空間的拡大を意識した名詞には、ランボオ独自の空間的広がりを感じさせる普通名詞として、glaciers (氷塊) がある。この氷塊の類義語は、『イリュミナシオン』ではしばしば極地を想起させる言葉として、*Après le Déluge* (「大洪水のあと」)、*Barbare* (「野蛮人」)、*Métropolitain* (「メトロポリタン」<sup>(8)</sup>)、*Dévotion* (「献身」) などの作品の中に登場する。とりわけ「献身」では、「氷」の用いられている段落は、極地 *polaire* という言葉で締め括られている。また「メトロポリタン」でも、「氷塊」は「極地」と同じ段落で用いられている。このように、極地と「氷塊」との関連は切り離せない。

土地を表す名詞を効果的に配置することによって、「岬」の語り手は、視点の移動と詩的空間の拡大を可能にしている。それでは、これらの名詞が、どのような語順で配置されているのであろうか。

### 【視点の移動と拡大のための後置修飾】

先に述べた通り、「岬」の文構造では、名詞とそれを修飾するための句や節を、一つのパターンとして反復する形が顕著だ。当然のことながら、フランス語において、後置修飾は珍しい用法ではない。後置修飾の場合、読み手は、被修飾語である名詞を先に認識することになり、その名詞についての説明を、後置された修飾句や修飾節で認識することになる。つまり、この名詞と修飾句や修飾節というパターンは、視点の移動をもたらし、詩的空間の拡大に働く、効果的な技法であると言える。

例えば、『イリュミナシオン』に収められている *Fleurs* (「花々」) の第1段落では、読み手の認識が一点から拡大していくように、修飾句を効果的に挿入する形で、開花が描写されている。また、*Enfance* (「幼かりしころ」) II でも、冒頭では、少女の姿を認識するところから始まり、視点を次々と移すことで、詩的空間の拡大に成功している。そして「岬」

でも、この後置修飾が功を奏しているのではないだろうか。

「岬」の第1文では、まず、brickという名詞の直後に、en largeという修飾句と、en face de cette Villa et de ses dependancesという修飾句が連なっている。このふたつの修飾句は、どちらも動詞trouventを修飾する副詞句だが、読み手にbrickを想起させたあとで、その「舟」が沖合いに在り、更に「この別荘」と「その付属施設」に対峙しているという順で認識させる。この際、視点は「舟」から「沖合い」に、そして対峙する「別荘と付属施設」へ移動して、詩的空間の広がりを見せる。更に、Villaとdependancesを先行詞にする、関係詞quiによって、修飾節が続けられる。quiに導かれる関係詞節内では、主語と述語動詞が倒置されていることは前述した通りだが、これも、視点を拡大するために、「形作っている」という言葉のformentを先行させ、やがてそれがpromontoire（岬）であることを認識させる順に並んでいる。更に、この岬が大ききなものであると読み取るために、promontoireを被修飾語とした過去分詞による後置修飾句が、3回繰り返されるqueによって並列されて、この詩的空間が、土地を表す固有名詞によって、ひとつの広大な世界へと拡大している。

このような後置修飾の効果は、第1文にとどまらず、この作品全体に共通している。そして特に第2文前半部分では、後置修飾が、より顕著な特徴として認められる。10の名詞（fanums、vues、dunes、canaux、Embankments、éruptions、crevasse、lavoirs、talus、façades）が被修飾語として並列され、後置修飾句（fanumsにかかる後置修飾のみ節）を伴っている。この並列の特徴は、fanums、vues、dunes以外の名詞を修飾する後置修飾句に、前述した詩的空間の拡大を担わせる、地理的固有名詞と、或いはランボオ独自の空間的広がり想起させるglaciers（氷塊）が含まれていることだ。つまり、まず中心となる視点としての普通名詞を提示し、更にそれを中心点として拡大する言葉を後置するという配置になっ

ているのである。

さて、第2文後半では、前述したように、railway（鉄道）を主語とした文が展開されている。述語動詞が3つ（flamquent、creusent、surplombent）並列に置かれ、共通の目的語はles dispositions（配置物）をとっている。そして、この「配置物」を包み込むように、被修飾語に「配置物」を取る3つの修飾句（節）（de cet Hôtel、過去分詞choisiesで始まる修飾句、dontで始まる修飾節）が並列される。

第2文後半が複雑に入り組みながらも、詩的空間を拡大しながら、視点をまとめている文構造では、名詞（被修飾語）と後置修飾句（節）のパターンが重箱のような形で配置されている。包括的なひとつの都市として、岬が認識されるためには、そこまでに並列されてきた名詞を括る「鉄道」の持つ統合的な意味が重要である。このことはニック・オズモンドも、「外界へと拡張していくのではなく、制度がそれ自体の中で完結し、岬の内部に於いて内部交流を確実にしながら、組織的ネットワークは、鉄道によって象徴化されている。」と指摘している<sup>(9)</sup>。つまり、「鉄道」という言葉を主語として、それまでの断片化した名詞を統合する述語動詞が提示された時点で、それまでの名詞がすべて包括される。しかし、cet Hôtel（このホテル）は内部の膨張を止めない。反対に、更に空間的には広大な土地を示すl'Italie、l'Amérique、l'Asieといった、constructionという名詞を修飾するための修飾語を連ねて、「このホテル」の詩的空間を拡大させるのである。

後置修飾の効果は、最後の節の中にまで見られる。先行詞はいくつか解釈の分かれるところであるが、l'espritであるとするならば、この名詞を先行詞とする関係代名詞quiの節は、この大きな岬全体を包括し、詩的空間を最後まで広げる修飾節であると言える。名詞による作品の終結によって、詩的空間が統合される。これと同様の方法は、「メトロポリタン」



にも見られる。「メトロポリタン」では、段落の末尾が全て、単独の語で結ばれており、末尾の単語が、それぞれの段落の内容や情景を統括している。「岬」の末尾も、名詞止めによって、これと同様に、統括されているのである。

### 【語り手について】

「岬」の語り手について、作品の中で言及されている所は、わずかに2点である。ひとつは第1文の8つめの単語 *notre*（僕たちの）である。一人称複数形所有格であるこの言葉は、*brick*（舟）を修飾する語である。つまり、語り手の視点は、まず、この舟に向けられていることは明らかである。

もうひとつは、第2文後半の一節である。再度引用する。

dont les fenêtres et les terrasses à présent pleines d'éclairages, de  
boissons et de brises riches, sont ouvertes à l'esprit des voyageurs  
et des nobles — <sup>(10)</sup>

今となつては、炬火と酒とたゆたに吹く爽風に溢れる窓とテ  
ラスが、旅人と貴人の精神に開かれている —

ここでは、その際に特徴的な *voyageurs*（旅人）と *nobles*（貴人）という言葉が使われている。

ランボオの詩作に於いて、「旅人」というモチーフは、しばしば一人称で用いられている。いわゆる初期韻文詩では、放浪を主題とした作品は、*Sensation* や *Ma Bohême* (*Fantaisie*) などが挙げられ、『地獄の季節』でも *Mauvais sang*（「劣悪な血」）の中で、放浪する旅人の具象化された姿が描

かれている<sup>(11)</sup>。中地義和氏は、著書の中で*Soir historique*（以下「歴史的な夕暮」）を取り上げ、次のように述べている。

これらの連想の主である「世間のやりきれない金銭沙汰から手を引いた素朴な旅行者」とは、ランボー的詩人の戯画的分身です。（中略）自然を横断する旅あるいは放浪は、韻文詩のランボーにとって詩想の源泉でした。第二章で見た「感覚」を思い出しましょう。後期韻文詩の「渇きの喜劇」で、「それに昔の旅人に戻っても／緑の旅籠が／僕に開かれることはもうない」と痛切な調子である決定的喪失が語られるときも、「旅人」*voyageur*は高貴さを欠いていません。<sup>(12)</sup>

「旅人」は、語り手であるランボオ自身を示す言葉である。そして「岬」でも、第1文で示された*notre*という一人称は、舟と密接に結びついており、漂流者あるいは旅人といった人物像とは切り離すことが難しい。この節の中で、*les fenêtres*（窓）と*les terrasses*（テラス）は、語り手に向かって開かれているのである。窓とテラスが開かれ、光が満ちているという状況によって、語り手の視点の中心であった舟の漂う沖合い（外界）の詩的空間と、岬（別荘と付属施設、巨大な建造物の存在する内部）の詩的空間<sup>(13)</sup>とは、この最終部分において完全に融合され、視点は*Palais-Promontoire*（岬御殿）へと向けられる。「岬」は、これまで語られてきたものを包括した視点で結ばれる。

### 【結語】

「岬」は、『イリュミナシオン』の中に見られる都市詩篇の中でも、風景描写が多い作品である。しかし、この架空の都市の描写には、語り手

の視点が重要である。その技巧的な語りによって、移動する視点と拡大する詩的空間は、一点から全体へと導かれている。空間の拡大を意図した、厳選された名詞の並列と、その名詞を後置修飾する句や節のくりかえしを用いることで、詩的空間を広げ、第2文後半部分で、それまでに描写してきた建造物を統合し、更なる詩的空間を拡大させることに成功している。終結語として、名詞を用いることによって、詩的空間の統合を完全にした。

ランボオの都市創造は、視点の移動をいかに描いているかが、作品を楽しむ上での鍵であると考えられる。「岬」という作品は、この視点の移動を詩的空間の拡大へと連携させた、驚異的な作品ではないだろうか。

#### 【注】

- (1) 中地義和氏は、「岬」についての解題の中で、「「岬」を形成する<別荘>=<ホテル>=<宮殿>と三様に名指しされる場所の「描写」のみからなる一篇で、主題論的には一連の「都市詩篇」に通じる。」と述べている。(平井啓之、湯浅博雄、中地義和『ランボー全詩集』青土社、1994、p.742.参照のこと。)また、宇佐美斉氏も、「主題論的には、都市詩篇に連なる一篇」と述べている。(宇佐美斉『ランボー全詩集』筑摩書房、1996、p.371.)
- (2) 平井啓之、湯浅博雄、中地義和『ランボー全詩集』青土社、1994、p.742.参照。中地氏は、「岬」についての解題の中で、『「イリュミナシオン」における描写の特質を最も顕著に表すテキストと言える。」と述べている。
- (3) Rimbaud: *OEuvres*, éditions Garnier, Sommaire biographique, introduction, notices, relevé de variantes, bibliographie et notes par Suzanne Bernard

et André Guyaux, Paris, 1978. p.299.

- (4) 宇佐美氏は、「構文的には二文のみから成る。ただし、末尾の「岬」Promontoire を、「宮殿」Palais のあとのピリオドに続けて書き加えられたものと見なせば、三文ということになる。」と指摘している(宇佐美斉『ランボー全詩集』筑摩書房, 1996, p.371.)。また、A. Guyaux も、「*Le ms. porte Palais. Promontoire. Le mot Promontoire semble ajouté.*」と書いている。(Rimbaud: *OEuvres*, éditions Garnier, Sommaire biographyque, introduction, notices, relevé de variantes, bibliographie et notes par Suzanne Bernard et André Guyaux, Paris, 1978. p.299.)
- (5) 平井啓之、湯浅博雄、中地義和『ランボー全詩集』青土社, 1994, p.742.
- (6) 同上, p.744.
- (7) 同上, p.742. 中地義和氏は、描写されている場所を、「「岬」を形成する<別荘>=<ホテル>=<宮殿>と三様に名指しされる場所」としている。
- (8) *Métropolitain* という言葉が多義的なものであることによって、日本語訳も統一されたものはないようである。宇佐美氏は、「タイトルはここでも、形容詞なのか実詞なのか判然としない。」とした上で、「ここでは Marine を「海の光景」と訳したのと呼応してこのように訳した。」と、このタイトルを「首都の景観」としている(宇佐美斉『ランボー全詩集』筑摩書房, 1996, p.360.)。また、中地氏は、「都会人」とし、ルビで「メトロポリタン」とふっている(平井啓之、湯浅博雄、中地義和『ランボー全詩集』青土社, 1994, p.277.)。また、小林秀雄訳では「メトロポリタン」となっている(アルチュール・ランボオ、小林秀雄訳『ランボオ詩集』東京創元社, 1998, p.127.) ことから、筆者は「メトロポリタン」と訳した。

- (9) Arthur Rimbaud, *Illuminations; Coloured Plates*, edited by Nick Osmond, (University of London, The Athlone Press, 1976.) p.147.
- (10) Rimbaud: *OEuvres*, éditions Garnier, Sommaire biographique, introduction, notices, relevé de variantes, bibliographie et notes par Suzanne Bernard et André Guyaux, Paris, 1978. p.299.
- (11) 『地獄の季節』の「悪い血」の、「Encore tout enfant,」に始まる書き出しの第五節は、宇佐美氏の説明によれば、「幼年時代の思い出。徒刑囚やならず者への親愛。放浪者の生活。」(宇佐美斉『ランボー全詩集』筑摩書房, 1996, p.253.) である。第五節の第一段落から第三段落までは、放浪者についての記述が見られ、語り手が放浪者の足跡を追って旅をする情景が描かれている。
- (12) 中地義和『ランボー 自画像の詩学』岩波書店, 2005, p.276.
- (13) 中地氏は、「「旅人や貴族の精神へと開かれ」た「窓」や「テラス」は、中心的な場所とその外部とを区別する境界を成さないで、逆に両者を融合させる。」と述べている。(平井啓之、湯浅博雄、中地義和『ランボー全詩集』青土社, 1994, p.743.)